

Bleak House と *Our Mutual Friend* における女性と結婚について

山本 まゆみ

1、はじめに

ボーヴォワールは『第二の性』の中で、「女は男を基準にして規定され、区別されるが、女は男の基準にはならない。女は本質的なものに対する非本質的なものなのだ。男は主体であり、絶対者である。つまり、女は他者なのだ」(6)と述べた。これが1949年のことだが、歴史をさかのぼって見ても女性に対する状況は変わらない。

『旧約聖書』の「創世記」では神は人のあばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさぎ、そのあばら骨で彼の手助けとなる女を造り上げられたと書かれている。「聖書の時代にはヘブライ人の夫は一人以上の妻を持つことが許され、妻を捨てたくなつた場合は、離婚証書を書き、それを二人の立会人の前で彼女に手渡し、暇を出すだけでよかった」(Yalom 3-4)。イエスがファリサイ派の人々に語ったところによると「創造主は初めから人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従つて、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」ということで(阿部 81)、さらに中世になると、結婚は七つの秘蹟の一つとなり、一夫一婦制が強要され、離婚は許されなかった(阿部 184-186)。このように夫と妻をめぐるはさまざまな歴史があるのだが、もっ

ばら過酷な状況を耐えるのは女性で、マリリン・ヤーロムは『妻の歴史』の中で恐ろしいルールを紹介している。それは「親指ルール」と呼ばれるもので、男の親指より太くない鞭なら妻を打っても良いとする不文律は、英国と米国の多くの地域で十九世紀まで続いていたという (Yalom xvi)。十六世紀にはマルティン・ルターが結婚のもつ秘蹟的意義を否定し特殊な事情の場合には離婚および再婚を許したが、これは離婚を許さないカトリックの方針とは著しく異なるものであったと新井明が『ミルトンの世界』で指摘している (110-111)。ジョン・ミルトンもまた 1642 年のメアリ・ポウエルとの不幸な結婚の後に、離婚に関して四冊の書を書いたが、「夫にとってふさわしい助け手でない女性は離婚も止むをえない」と述べている (104)。結婚と離婚をめぐるさまざまな議論があったのだが、1753 年のハードウィック卿の結婚法では「結婚を支配する法律に一貫性と論理性がもたらされ、教会で行われる結婚のみが法的拘束力を持つことになった。この法律では二十一歳以下の者のいかなる結婚も、その両親または保護者の同意がない場合には無効とされた」(Stone 32)。1792 年にはメアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』の中で「女性を解放せよ。そうすれば、男性がますます賢明で有徳になると同じように、女性も速やかに賢明で有徳になるであろう。何故かというと、男性と女性は、手を取り合って進歩しなければならないからである」(201) と主張したが、彼女の考えは「嘲笑の的であり、以来何年もの間、フェミニストの考えに対する興味は極めて薄かった」(Williams 1)。そして 1869 年に J.S. ミルは『女性の隷従』で「元来、女性は暴力をもって略奪され、あるいは彼女の父親からその夫たるべき人へ売られたものであった。ヨーロッパにおいても、最近にいたるまで、父親は娘の結婚にさいして、当人の意志にはおかまいなしに、自分の好き勝手に娘をかたづける権力をもっていた」(146) と説明している。確かに、女性にとって厳しい状況は、次のような

1836年のノートン夫人の言葉からも理解できる。彼女は夫ジョージ・ノートン議員と別居し、三人の子供との面会権を拒否されたのだが、「妻が虐待のため別居を求めようとすれば、それは命にかかわるか肢体不自由になる恐れのある虐待でなければなりません」(Yalom 187)と個人的体験を語った。

このように、女性の歴史を見ていくと、女性がいかに残酷に踏みにじられてきたかが明らかにされる。父権制社会における女性の問題を考えるフェミニズムの観点からチャールズ・ディケンズの二作品、*Bleak House* と *Our Mutual Friend* を考察したいと考える。

2、本論

Bleak House は1852年から1853年に書かれたが、全知の語り手とエスター・サマソンの二人によって、交互に語られる。物語の内容の一つは「ジャンディス対ジャンディス」と呼ばれる遺産をめぐる争いで、もう一つの物語はエスターの出生の秘密にまつわるもので、レスター・デッドロック卿の夫人は結婚以前にホードン大尉と恋愛し、女の子（エスター）を産んだ。その秘密を知った弁護士タルキングホーンはレスター卿に報告すると夫人に言う。家を出た夫人のあとをエスターは追いかけるが、夫人は亡くなったホードン大尉の墓の前に倒れて死んでしまう。

ディケンズにとって理想の女性とは *Oliver Twist* の中に描かれたローズ・メイリーのような女性ではないだろうか。

彼女は十七をすぎてはいなかった。ほそやかに精緻をきわめた姿、それがあまりにもやさしく優雅、あまりにも美しく清らかなので、この世のものとも思われず、この世の粗野な人間たちとまじわることが

できるとは思えぬようであった。濃碧の眼と気高い頭の形にあらわれている深い知性は、彼女の年頃のものとも、この世のものとも思われず、しかも、さまざまな愛くるしい、気持ちのよい表情、顔のまわりにきらめいて、一点の影ものこさぬ数千の光、なかでも、その笑顔、朗らかな、たのしそうな笑顔は、家庭や炉辺の平安と幸福のためにつくられたもののようであった。(194, 中村能三訳)

ヴィクトリア朝のヒロインは受動的な存在で、常に気を失ったり、重い病気にかかったりして他の人たちから助けられていた (Williams 36)。結婚に関しては二重の基準があり、『ウェストミンスター評論』は 1864 年に世論の風潮を次のように要約した。

名誉を重んじる心を少しでも持っている男性で、夫婦の間の信頼を侵害した妻を暖かく迎え入れ、抱擁することのできる者は確かにいないが、心を傷つけられた妻が、過ちを犯した夫を優しく許そうとしないような場合はほとんどない。(Williams 29)

結局、夫はどのような行動も許され、一方、妻は過ちを許されることはないので。J.S. ミルは女性の味方として、後に彼が 45 歳の時に結婚することになるハリエット・テイラーに 1854 年に手紙を書いた。

あのディケンズの奴の最新作の *Bleak House* を先日ロンドン図書館で偶然見つけて、家へ持ち帰り読んだが、彼の作品の中で最悪のもので私が全く好きになれない唯一の作品だ。これは鼻持ちならない厚かましさと女性の権利を嘲笑い、低俗な男が「学問のある女性」を子供や家庭を顧みないと言ってからかうやり方と全く同じだ。(Critical Heritage

ディケンズとミルは女性に関する意見においてお互いに大きく異なっていた。ディケンズは女性の使命は家族を幸せにすることであり、家を出て活動する代わりに家にとどまるべきだと信じていた (Williams 84)。

さて *Bleak House* に戻って、Dedlock という名前についてだが、'come to a deadlock' という表現があり、Dedlock と似た deadlock は行き詰まりを意味する。そしてデッドロック令夫人の人生はまさに行き詰まりだった。彼女が最初にこの小説に登場する時、「子供がいない」(11) と描写され、番小屋の可愛がられている子供を見るとひどく不機嫌になる。彼女は自分自身の子供がいないことに不満を感じていたのだ。レスター・デッドロック卿は「高潔で強情、信義を重んじ気概に富み、きわめて一徹、この上もなく頑迷な人物である。彼は夫人よりも、たっぷり二十歳は年上で」(12)、「夫人に対する彼の優しさは、初めて求婚したとき以来少しも変わったことがなく、これが彼のうちにあるロマンティックな感情を示す唯一のささやかな特徴だった」(12)。「世間では今でも、彼女には親類さえいなかったとうわさしていた」(12)。しかしながら、結婚後、彼女は「上流社会の消息の中心となり、上流社会という木の頂上に位置していた」(12)。ある日彼女はかつての恋人のホードン大尉によって書かれた書類を偶然見つけ、驚きを隠せなかったために弁護士タルキングホーンに秘密を嗅ぎつけられる。デッドロック令夫人の娘、エスター・サマソンは養母に育てられたが、誕生日を祝われることもなく、養母から「おまえのおかあさんはね、おまえの顔に泥をぬり、おまえはそのおかあさんの顔に泥をぬったんだよ。いつかそのうちに—もうじきにだよ—おまえにもその意味がもっと分かって、身に染みて感じる時がくるだろうけれども、その気持ちは女でなければ分らないよ。私はもうあれを赦してやりました。あれが私に対し

ておこなった罪をだよ。だから、それについてはもうなにも言いません。でも、どんなに大きな罪だったかは、とてもおまえには分らないだろうよーだれにだって分りません、そのために苦しんだこの私のほかにはね」(19)と言われた。養母の死後、エスターは後見人のジャーディス氏により教育を受け、その後、彼の屋敷で話し相手として働くようになる。エスターを愛するガッピーがデッドロック令夫人にエスターの本名はサマソンでなくホードンだと告げると夫人は「ああ、わたしの子供！」(364)と言って嘆き悲しむ。夫人はエスターが天然痘にかかり回復したと知ると、エスターに会い自分が母親だと告げ、地面にひざまずいて許しを請う。レスター卿は妻の秘密を知っても決して彼女を責めたりせず、妻へのあわれみを示したが、夫人はそんな夫の気持ちも知らずに彼女の恥辱が世に知られると考えて家を出る。夫人の生涯は墮落した女がどんなに罪を悔いても幸せを手に入れることはできないことを示しているのだろう。

しかし、約十年が過ぎると、ディケンズ自身の生活にも、そして彼の作品にも大きな変化が起こる。ディケンズは妻のキャサリンと別居し、若い女優エレン・ターナンとの付き合いが噂されるようになった。この出来事が彼の女性観に影響を与えたのだろう。メリン・ウィリアムズは『女性たちのイギリス小説』の中で新しい女性たちについて次のように述べた。

十九世紀の最後の二十五年間は、女性の役割が広範に議論の対象となりつつあった時代である。高等教育、労働市場における女性労働の増加、選挙権運動、そして(限られた程度ではあるが)産児制限、これらすべてが、世界は今急速に変わりつつあるという感情を生み出した。(40, 鮎澤乗光訳)

1868年にはイライザ・リン・リントンが享楽のために生き、親の権威を

認めようとしないう若い女性に対して「現代っ娘」という名称を創り出した。(Williams 41) この現代っ娘の少なくとも一人を我々は *Our Mutual Friend* の中に見出すことができる。彼女の名前はベラ・ウィルファーで、彼女の父は貧しい事務員で、「天使童子」(32) のように無邪気な人だった。彼女の母は「背が高く、角張った体つきで、威厳に満ちていた」(33)。「反対のタイプを結びつけるという結婚の原則により」(34)、ベラの両親は弱い夫と強い妻のカップルだった。ウィルファー氏は *Oliver Twist* のバンプル氏から始まり、*Bleak House* のバグネット氏を含む、女房の尻に敷かれている夫の一人だった。娘のベラが初めて登場する時、彼女は「姿も顔もずばぬけてかわいいのに、表情にも肩のへんにも苛立ちと不機嫌とがにじみでている十九くらいの女の子」(34) と描写された。彼女の元の恋人はジョージ・サンプスンで、彼女にどんなことをされても我慢していた。しかし彼女は金持ちになるチャンスを見つけたので、彼を捨ててしまう。ハーマン爺さんが初めて幼いベラを見た時、彼女は「ちっちゃなあんよで地団太を踏みながら、泣きわめき、ちっちゃな子供帽でパパをさんざんぶっていた」(42)。するとハーマンが彼女を「行く末楽しみな娘」(42) だと考えた。そしてもし彼女が一度も会ったことのないハーマンの息子と結婚すれば、お金を手に入れられることになっていた。ベラと彼女の妹のラヴィニアは奔放で、いつも母親に不平を言い、反抗的である。ベラの元の彼のジョージ・サンプスンは時々話をしようとするが、ラヴィニアは「彼の知力を全く信用せず、彼のステッキの頭を止め栓のように彼の口に乱暴に押し込んだので、彼の眼に涙が湧き上がる」(112)。親なぞちっとも怖くないベラは「ママがあんなにいじめているパパではなくて誰か他の人と結婚すればよかったのにと思う」(449)。ベラは父に対して優しく振る舞い、「子供っぽい体つきの彼がひょこひょこ急ぎ足に去るのを見た時、そのみすばらしい服装と明るくじっと耐える姿に涙を流す」(315)。彼女

にとって父は「丸ぼちゃで神様のようなところもある弟的存在である」(320)。ベラの保護者のポッフィン氏はお金の邪悪な魔力によって醜く変身したふりをして、お金の囚われていたベラの心を変える。彼女は守銭奴（のふりをする）ポッフィン氏との縁を切り、文句ばかり言う母には内緒で、愛する人と結婚する。ベラとラヴィニアは二人とも「現代っ娘」(Williams 41)で、親の束縛を打ち破り、自由に考えている。*Bleak House* に描かれた家庭の天使たちとは、はるかに時代を隔てているかのようである。そして作者ディケンズの心の変化もまた示していると思われる。

リジー・ヘクサムはジェス・ヘクサムの勇敢で愛情深い娘で、「年齢は十九か二十歳、肌は小麦色で二本のオールを軽々と引いている」(1)。「彼女の強い眼差しには、一抹の不安、あるいは恐怖の色が宿っている」(1)。彼女の父はテムズ川で死体を漁っている。彼女は弟のチャーリーを助けて学校へ行かせるが、父は子供が勉強するのに反対なので、彼には弟のことは秘密にしている。ユージーン・レイバーンは資格を取ってから七年になるが訴訟依頼人の来たことのない法廷弁護士で、父によって財産つきの花嫁候補を決められ、生まれる以前に従事すべき職業ならびに歩むべき人生コースも決められていた。しかし彼は黒い髪の少女リジーが忘れられない。リジーは「ほとんど教育を受けたことがないが、様子といい、話し方といい、無教育な人とはまず見えない」(231)。弟チャーリーの先生のブラッドリー・ヘッドストーンもまたリジーを愛し、レイバーンに対し「荒れ狂う嫉妬と激しい怒り」(288)を感じる。リジーはレイバーンを選び、彼に「愛も真心も捧げ、彼のために死んでもよい」(349)と思う。弟チャーリーは姉がヘッドストーンの求婚を断ったことを怒る。なぜならヘッドストーンは有力者で義理の兄になれば自分にとって有利なのに、断ったことで自分の立身出世が邪魔されてしまうから。リジーはレイバーンに自分が「労働者階級の女なので、彼とはかけ離れた世界に生きてい

る」(693)と話す。レイバーンがヘッドストーンに襲われた時、リジーは川に落ちる音を聞いて、ボートを漕ぎ、渾身の力をふりしぼって彼を抱き上げ、ボートの底に横たえる。病床のレイバーンとリジーは結婚し、二人で階級を打破するが、やつれた姿の夫の方が妻の腕にすがり全面的に頼っている。妻と夫の力関係は明らかに逆転し、たくましいのは妻で、怪我をした夫を死の淵からたった一人で救いだし、新しい人生を与える。

1852年から1853年に書かれた *Bleak House* には断固とした家父長制が存在していた。そして、その中の女性たちも弱く悲劇的な要素が多く示されていた。しかし1864年から1865年に書かれた *Our Mutual Friend* では父親は影のような存在となり、家父長制の残骸しか見られない。これは価値観が時代とともに変化していったことと、作者ディケンズ自身の心の変化を示しているように思われる。1858年頃から始まった妻のキャサリンとの別居騒動では義理の母のホガス夫人との争いや、義理の妹ジョージナとの近親相姦の疑い (Ackroyd 889)、最も古い友人の一人で『パンチ』の編集長のマーク・レモンとの不和 (Ackroyd 912) など多くの悲しい出来事が連続して起こった。さらに1863年のサッカー、ディケンズの母、息子ウォルターの死 (Ackroyd 990) を経験する中で書かれた *Our Mutual Friend* の中に今までの作品と異なる要素が現れても不思議ではないだろう。

3、おわりに

ボーヴォワールは『第二の性』の中でアンリ・ド・モンテルラン、D. H. ロレンス、ポール・クローデル、アンドレ・ブルトン、スタンダールの女性に対する態度を検討した (214-261)。彼らの中では、ロレンスが男の優位性を熱狂的に信じて『無意識の幻想』において「男は目的に向かって進み、超越を体現しているが、女は自分の感情にひたっていて内面性そ

のものである。女は内在性に定められているのだ」(232)と述べた。これに対して、スタンダールは「女の優しい友」(253)で、「断固としたフェミニスト」(261)であり、「一般的な自由という名においてだけでなく、個人の幸福の名においても、女の解放を要求した」(261)と言われている。ディケンズの場合は、特にその私生活において、フェミニストとは言い難いようである。1858年の初めに妻キャサリンへの愛情を失ったとピーター・アクロイドはディケンズの伝記で書いているが(852)、その発端は若い女優エレン・ターナンへ贈ったブローチあるいはブレスレットが間違っ てディケンズの家 に修理した後に届けられたことにあった(854)。その後キャサリンの母やディケンズの友人たちを巻き込んで大騒動となり、結局はキャサリンと別居することになる。1870年6月9日に彼が亡くなった時に付き添っていたのは義理の妹のジョージーナとエレン・ターナンであった(1140)。さらに1869年に書かれた遺言書でも第一番にエレン・ターナンに£1000を贈るとあり、それと対照的に妻キャサリンには遺言書の一番最後に、別居してから、これまで年£600与えてきたと述べるのみである(Forster 857-859)。ディケンズの作品に戻って、あらためて彼の描いた女性を見てみると、*Bleak House*では伝統的な家庭の天使のヒロインと新しい女性との間で作者ディケンズは気持ちが揺れているようである。しかし天使のような金髪 のヒロインのエイダにはこの物語を牽引する力は与えられていない。罪の子エスターが、遠慮がちに物語の中心となっていく。さらにフェミニストの女性、ウィスクさんも登場するのだが、彼女の「女性の使命が主として家庭という狭い領域にあるという考えは、女性に君臨する暴君、すなわち男による極悪非道な中傷である」(第30章)という主張は、まだ作者ディケンズの批判とからかいの対象でしかなかった。それが劇的に変化するのが *Our Mutual Friend* で、家父長制は粉微塵となり今や打ち捨てられている。そして精神的にも肉体的にも、弱い女性より

逞しい女性、男性に助けられる女性より男性を助ける筋肉質の女性が小説のヒロインとなったことに、この小説の存在意義の一つがあるように思われる。

参考文献

1—テキスト

Dickens, Charles. *Oliver Twist*. Ed. Fred Kaplan. New York and London: W. W. Norton & Company, 1993.

Dickens, Charles. *Bleak House*. Ed. George Ford. New York and London: W. W. Norton & Company, 1977.

Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. Ed. Michael Cotsell. Oxford: Oxford University Press, 1989.

—翻訳

チャールズ・ディケンズ作 / 中村能三 (訳) 『オリバー・ツイスト』新潮社、2011

チャールズ・ディケンズ作 / 青木雄三、小池滋 (訳) 『荒涼館』筑摩書房、1978

チャールズ・ディケンズ作 / 間二郎 (訳) 『我らが共通の友』筑摩書房、1997

2—文献

Ackroyd, Peter. *Dickens*. Bucks: Minerva, 1991.

de Beauvoir, Simone. *The Second Sex*. 1949. Trans. Constance Borde and Sheila Malovany-Chevallier. New York: Vintage Books, 2011.

Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Ed. J. W. T. Ley. New York: Doubleday, Doran And Company 三, [c. 1872-74]

Mill, J.S. *On Liberty and Other Writings*. Ed. Stefan Collini. Cambridge: Cambridge University Press, 2008. [J.S. ミル 『女性の解放』大内兵衛・大内節子 (訳)、岩波文庫、1989]

Milton, John. *Complete Prose Works of John Milton*, Vol. II. Ed. Ernest Sirluck. New Haven: Yale University Press, 1959. [ジョン・ミルトン 『離婚の教理と規律』新井明・佐野弘子・田中浩 (訳)、未来社、1998]

Stone, Lawrence. *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*. London: Penguin,

1990.

Williams, Merryn. *Women in the English Novel 1800-1900*. New York: St. Martin's Press, 1984. [メリン・ウィリアムズ『女性たちのイギリス小説』鮎澤乗光・原公章・大平栄子（訳）、南雲堂、2005]

Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman: with Strictures on Political and Moral Subjects*. London: Everyman, 1995.

Yalom, Marilyn. *A History of the Wife*. New York: Harper Collins Publishers, 2001. [マリリン・ヤーロム『妻の歴史』林ゆう子（訳）、慶應義塾大学出版会、2006]

Dickens: The Critical Heritage. Ed. Philip Collins. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.

阿部謹也『西洋中世の男と女—聖性の呪縛の下で』筑摩書房、2007

新井明『ミルトンの世界—叙事詩性の軌跡』研究社出版、1980